

地域イメージの生成メカニズムの文化的背景について
—中国人の北海道観光を中心に—

周 菲 菲

中国人の観光実践の特徴を見てみると、自治体や観光業者が生産・提示する地域イメージと中国人観光者が実際に消費するイメージにおける矛盾とズレが目立っている。本研究は、そのような地域イメージの生成過程における「比較」の要素及び「観光」と（中国でいう）「旅游」についての認識の差異を見つめ、越境的な地域イメージの生成メカニズムの文化的背景を解明してみるものである。

越境的な観光の現場では、観光者の個人が様々な実践の可能性を任意的に組み合わせ、自らの観光ルートや自身が発信する情報に導いてゆく実践が行なわれる。ここでは、「需要側」とみなされてきた観光者は、異なる時空間において、翻訳者であるとともに翻訳される対象として認識できる。観光者は、観光実践を通して観光地を翻訳している。たとえば、写真の撮影や土産物の購入といった実践は、場所を観光者のネットワークに翻訳し、ネットワーク間の交流を建設・規定する。いま、観光地をヴァーチャルな場所へと翻訳するという観光者の実践はますます活況を示している。その一方、観光プロモーターや観光地で暮らす人々も観光者を翻訳する。顕著な例として、観光者は人数や経済的な成功や失敗に翻訳される。この中において、観光地としての地域におけるローカルな主体が予想する観光者の実践と、観光者が実際に行う実践との間にずれ、すなわち「予想の逆転」が生じることがある。

「予想の逆転」とは、観光の提供者であるアクター側の予想と、観光者の実践のパターンは、逆転したプロセスによって導かれることを指している。前者の予想は原因論的な発想で、地域の今までの観光資源とみなされたもの（something）を観光者に提供する。後者は、地域の全てのものやイメージ、自らのこれまでの経験、及びこれから観光の中で経験することなど、あらゆるもの（anything）を用い、自分の新たな実践を「制作」しようという実践である。

越境的な観光実践を行う際の観光者のかつて母国（中国）における過去の実践が不在である。しかし、彼らのかつての実践とそれに基づいて制作される地域イメージが、新たに行われる観光実践の中で翻訳・共有され、更なる実践へと導かれる一連のプロセスが循環するのである。したがって新しく生成する地域イメージには、個人の過去の経験や文化的背景などの「不在」であるが継続的に働く過去のイメージが散りばめられているといえる。

例えば筆者の調査によると、地元の観光業者が小樽運河を中心に地域イメージを宣伝し、観光商品を生産しているにも関わらず、小樽における中国人観光者の観光実践では、電車で海を見かけたり、ガイドに海に連れて行ってもらうという偶然の出来事によって、「海」のイメージが重要なアクターとして動員・消費され、新たなネットワークを構成していることを明らかにした。中国の環境問題に関する認識が動員されていると考えられる。また、筆者は、日本観光庁が北海道で行う留学生モニター・ツアーに応募して留学生による観光活動に参加し、更に彼らによる地域イメージの制作・発信状況やネット上のコミュニケー

ションを参与観察した。観光活動が留学生によってインターネットでどうやって表出されるかを明らかにしようと試みた。ツイッターやブログの転載数とコメント数と結びつけて計算すると、中国人観光者においては「自然」と「食べ物」、そして日本式の温泉や畳といったサービスへの関心度が一番高いことが分かる。留学生が観光地で様々な体験をし、その中に自分で取捨選択し制作の作業を加え、インターネットに発信した。このような越境的な地域イメージの「制作」の作業には、北海道の様々なモノが中国人の趣味と組み合わせられていることが明らかである。例えば、食べ物の写真と、食べ物と自分を一緒に取る写真をブログに載せるといった行為が挙げられる。この行動の理由として、「中国人の嗜好」も挙げられるが、中国で一番使われている SNS の weibo という情報媒介物自体の性質も大きな役割を果たしていると考えられる。すなわち、複雑なストーリー（アイヌの歴史や科学館の展示についての説明）より、一目瞭然な綺麗な自然風景と食欲をそそる食事の写真、さらには中国と異なる日本の風習がより関心を引くものとなっている。さらに、weibo における情報の伝達には、時間の即時性と緩やかな柔軟性も伴っている。アクターとしての weibo は、人工物として人為的に作られたといえども、制作者の意図や利用者の心情、または情報の内容を超えて自律的な存在となっている。即ち、SNS によって、観光実践のネットワークが逆に組み替えられるというプロセスが見受けられる。

このプロセスのメカニズムには、中国人観光者の観光実践で動員される観光経験があり、とくに中国や出身地という「自文化」についての認識・経験と、自らの観光経験が潜んでおり、翻訳過程においてアクターとして働いている。そのような翻訳過程が繰り返される中で、日本／北海道の「観光資源化」の特色が評価されるようになっていく。この地域イメージは、観光実践の対象でありながら、比較の基準や差異の尺度といった機能を融合している。観光実践が行われるたびに、これらのイメージが想起され、関連する想像力も発揮され、観光者の地域イメージを再構成してゆく。

更に、「観光」の現場語である「旅游」という語彙の内包と外延は、その逆転の構造の規律を裏付けていると考えられる。日本の観光業者が中国人観光者の「観光」についての認識に疎いからこそ、以上の事例に出た認識のずれが生じたとも考えられる。中国本土の暮らし・観光の経験から地域イメージの消費を展開させる中国人の個人観光者の実践の特殊性が潜んでいる。

本稿では、越境的な地域イメージの生成メカニズムにおける「予想の逆転」における文化的背景として、観光者の認識に基づく「比較」の要素、電子メディアの利用、さらに「観光」についての理解の相違を挙げてきた。中国人の観光実践は一定の観光ルートや予め設定された観光商品のパターンではなく、中国人自らの経験の積み重ねと、時代の発展とともに、「予想の逆転」したプロセスに沿って変化してゆく。とくに個人観光の急増に伴い、中国人の観光実践もさらなる多様性を呈することとなるのであろう。

(しゅう・ふえいふえい／南京航空航天大学)

民話における他界観分析 —松谷みよ子の事例を通して—

佐 崎 愛

はじめに

今回は博士課程前期の間を通して私が抱いているテーマである、日本人の他界観の変容を歴史的・通時的に追うことの一部を発表した。そのため本稿では、本研究のスタートラインとして設定した「現代日本人の死後の観念、すなわち他界観は一体どのようなものであるのか」という問題関心を、松谷みよ子(1926-2015)が収集し蓄積し記した『現代民話考』(松谷 全 12 巻:1985~1996)を素材として、宗教学的のアプローチを通して取り上げた。この問題を取り扱う理由は、過去の日本人の他界観に関する先行研究を調べていくうちに他界観のイメージに時間的な変化が見られると考えたためである。

1. 使用する語彙の定義

まず「他界」「よみがえり」「現代民話」という本稿において重要な3つの言葉を、辞書を参考にしながら私なりに定義した。それは次の通りである。①「他界：死後の世界」、②「よみがえり：一度死に（他界へ赴き）、再び生き返る事象・経験」（新谷、関沢 [編] 2005）、③「現代民話：松谷みよ子『現代民話考』における定義である「あつたること」より、現代において民間・民衆レベルに流布している物語」（松谷 1985~1996: V）と定義する。

2. 先行研究について

先行研究として、今回は主に3人の研究者とその研究・観念、および今回分析対象とした著者松谷みよ子と著作『現代民話考』に関して取り上げる。まず1つが柳田國男における山中他界の観念である。山中他界とは、死者の靈魂は近くの山へと登り祖霊として祀られ、秋になると山から下りて田の神になるとする観念である（柳田 1946）。2つ目は、ジャーナリストである立花隆の臨死体験研究である（立花 1994）。臨死体験の中では、そのイメージとして「お花畑」「川」のモチーフが頻繁に挙げられていた。3つめは諸岡了介が研究を行う「お迎え現象」についてである。お迎え現象とは「終末期患者が自らの死に臨んで、すでに亡くなっている人物や通常見ることのできない事物を多く見る類の体験」（諸岡ほか 2008: 223）と諸岡は定義している。このお迎え現象の中の「通常見ることのできない事物」の中に他界を表現するような言葉と共に「お花畑」「川」のイメージが多く用いられている。

次に分析対象である松谷みよ子とその著作について述べることにする。作家として有名な松谷は 1978 年から雑誌『民話の手帖』により現代の民話の収集を開始した。松谷は雑誌による呼びかけ、アンケート、聞き取りを通して現代民話を収集し『現代民話考』を著している。なお、松谷は収集するのみにとどまり、研究や分析等は行っていない。

3. 松谷みよ子『現代民話考』分析とその考察

私は構成要素を細かく分析し表にまとめることで、現代の日本人によってイメージされ

る他界の構成要素について考察を行った。またその際、場所的要素と登場人物・事物的要素に分けて分析を行った。結果、場所的要素としては多い順（以下同様）に「お花畑(90)」「川(80)」「橋(18)」、登場人物・事物的要素においては「家族・親族(48)」「不明な人物(23)」「乗り物(20)」が多くみられることが分かった。なお、括弧の中の数字は要素数である。

おわりに

結論として、現代における「他界」のイメージは以下の4つの特徴を挙げることができる。①最も多いイメージは「お花畑」「川」、②お花畑、川、橋は組み合わせられた状態でよく見られる、③閻魔は現世に帰るよう促す存在、④山中他界はほとんど見られない。今後は「お花畑」や「川」イメージがいつからどのように存在してきたのか、どのような社会背景から生まれたものであるのかについて探りたい。

なお、つたない本発表に際し学会員の皆さまから多くの有益な質問・助言をいただき、また特に手塚薫先生にご指導いただいたことを、この場を借りて改めて心から感謝申し上げます。

参考文献

立花 隆

1994『臨死体験』上下文藝春秋

松谷みよ子

1985～1996『現代民話考』全12巻、立風書房版（ちくま文庫版2003～2004）

諸岡了介、相澤出、田代志門、岡部健

2008「現代の看取りにおける〈お迎え〉体験の語り—在宅ホスピス遺族アンケートから—」東京大学グローバルCOEプログラム『死生学研究』9:223-205

柳田國男

1946「帰る山」『先祖の話』筑摩書房『柳田國男全集』13、ちくま文庫1990

（さざき・あい／東北大学文学研究科 博士課程前期）

非乳利用論考：乳利用には進まなかったリヤマ・アルパカ牧畜民と家畜との関係性 —ワイリヤワイリヤ共同体のE牧民世帯の事例から—

平田 昌弘

アフロ・ユーラシア大陸乾燥域の牧畜民社会では、乳に依存した生業が発達してきた。旧大陸の乾燥地帯の牧畜民社会では、乳をより多く搾るがために、家畜群を管理しているといっても過言ではない。乳文化は、アフロ・ユーラシア大陸乾燥域の牧畜において極めて重要な生業項目となっている。しかし、南アメリカ大陸のアンデス山脈では、標高約4000m以上の高地でケチュア系の牧畜民がリヤマとアルパカを群れとして飼養し、生業を営んでいるが、リヤマ・アルパカからは搾乳がおこなわれていない。本発表では、アンデス高地のリヤマ・アルパカ牧畜で搾乳がおこなわれなかった要因を検討するために、牧

畜民のリヤマ・アルパカ群管理、特に牧夫の母子畜間の介入について現地調査をおこなったので報告する。現地調査は、ペルー南部のアンデス山脈高地でリヤマ・アルパカ群を飼養するケチュワ系牧畜民を対象にし、放牧地の大きさ、宿営地の構造、日帰り放牧の方法、家畜頭数管理、子畜の出産、母子畜間介入について、2016年3月に参与観察とインタビューをおこなった。

調査地は、ペルー南部のアンデス山脈中に位置するクスコ県チュンビビルガス群ワイリャワイリャ共同体である。ケチュワ系牧畜民E世帯を対象とし、E世帯は標高約4600mのアンデス山脈高地で、リヤマ52頭、アルパカ348頭、ヒツジ約100頭、ウシ5頭、ウマ2頭を飼養して生業を営んでいる。放牧地は、3牧区を利用して家畜を飼養している。それぞれの牧区での放牧のための移動距離は、直線で約1km周辺であり、放牧地が比較的規模が小さく、放牧地面積が狭い範囲であることが特徴である。宿営地に設置された家畜囲いは、幅が約130m、奥行きが約150mであり、夜間に家畜を家畜囲いの中に入れて休息させる。つまり、家畜囲いの中では、家畜1頭当り平均で約24m²の土地、母子が寄り添って横臥するならば、母子ペア当り約7m周囲もの土地のスペースが、それぞれに割り当てられることになり、疎な家畜密度での家畜管理ということが特徴であることが指摘できる。

リヤマ・アルパカの子畜の出産に際し、毎日の日帰り放牧を実現させるために、母子畜分離を実施するかどうかを検討した結果、母子畜分離を全くおこなわない、おこなう必要がないことが明らかとなった。その理由は、1) 子畜が数時間で歩き始めるというリヤマ・アルパカの身体特性、2) 放牧の移動速度が遅いというリヤマ・アルパカの行動特性、3) 目的とする放牧地では家畜群はほぼ停滞しながら採食するというリヤマ・アルパカの行動特性、4) 放牧領域が狭いというリヤマ・アルパカ群放牧管理の特性、5) 放牧地の独占という所有形態に起因していた。更に、夜間の子畜の保護のための母子畜分離、子畜の離乳のための母子畜分離も全くおこなわれていなかった。しかし、出産(難産)の介助と母子畜の再会介助においては、牧夫による母子畜間介入が稀におこなわれていた。放牧への出発時と帰着時に一時的に家畜密度が高まり、母子畜は稀にはぐれることがある。このような母子畜のはぐれが生じた際には、母子畜の再会介助がおこなわれていた。

リヤマ・アルパカの母子畜管理の特徴は、母子畜は基本的には自由に一緒に過ごさせ、母子畜を強制的に分離していないことにある。「非母子畜間分離—母子畜間の関係性維持」の状況下においては、母子畜間への介入は多くを必要としない。孤児が生じたとしても、牧夫の「家畜が死ねば食料になるという価値観」から、乳母づけもしない。母子畜間に介入の契機が生じないということは、搾乳へと至る過程も生起し難いことになる。つまり、リヤマ・アルパカにおいては搾乳へと発展していかなかったことになる。これが、牧畜民と家畜との関係性の視座からのリヤマ・アルパカ牧畜の非搾乳仮説となる。リヤマ・アルパカ牧畜では強制的に母子畜を分離しないことによる母子畜間の関係性維持、そして、催乳という技術を必要とするなどラクダ科動物の搾乳への行為に至る難しさが、搾乳へと向かわせなかった重要な要因と考えられた。

(ひらた・まさひろ／帯広畜産大学)